

文字教育に関する一考察

——日本語研修コースでの取り組みを振り返って——

Gehrtz 三隅友子

Tomoko Gehrtz-Misumi

徳島大学国際センター

要旨

日本語教育における文字、ひらがな、カタカナそして漢字教育の重要性はいうまでもない。それは日本語では表記に、前述のかな二種と漢字に加えてローマ字や数字もまた使用するからである。初級時における文字学習はその後のより高度な読み、書きといった技能の基礎であり、さらに継続的な学習を促進することにもつながる。初級の日本語教育を実施する徳島大学日本語研修コースも、センター発足後の2003年に開講以来、学習者に合わせた文字教育の様々な取り組みを行っている。本稿は特に2008年秋期のコースを取り上げ、取り組みをどのような意図で行っているかを明らかにし、またそれらに対する学習者からの評価をもとに、今後の日本語教育における文字教育及び文字学習を考えるものである。

キーワード：学習者の視点・アクションリサーチ・連想法・文字教育・自律学習

はじめに

徳島大学国際センター日本語研修コースでは、2008年10月18日にカッケンブッシュ知念寛子先生を招き、連想法に基づくひらがな教材を使ったモデル授業を行った。学習者10名と日本語教師及び養成講座修了者11名が見学者として参加した。そしてこの授業観察から得た情報をもとに参加者が意見交換をする以外に、見学者が学習者からの感想や意見を直接に収集し、さらに自らの意見を含めて発表し検討するという能動的な活動を組み込んだ。

これは本コースの秋の学習者全員が非漢字圏の10名であることや、来日前の文字学習や日本語に関する情報取得が望めないことが判明していたため、コース開始前にも準備が必要となったからである。

1. 徳島大学日本語研修コース

1.1 コースの概要と学習者

大学院予備教育、文部科学省国費生対象の大学院進学のための半年間の集中日本語学習のコースである。そしてコースの目的を、「日本語を使って日常生活ができること」としている（詳細は本誌年報の日本語研修コースの部分を参照のこと）。2008年秋期の学習者は鳴門教育大学へ進む教員研修生8名（25から35歳までの自国では言語・数学等の教師）と徳島大学大学院進学予定の

1名の9名（ドイツ・インドネシア・ミャンマー・ブラジル・メキシコ・ラトビア・セルビア・アフガニスタン・イエメン・ケニア）である。

1.2 期間及び活動

2008年10月8日から2009年2月27日まで（12月24日から1月4日の冬休みを含む）、教室での授業以外に①研修旅行（ホームビジット・ホームステイ）②日本文化体験（華道・書道等）③教育機関訪問（幼稚園・小中高等学校）等の活動も日本語の授業としている。

1.3 日本語学習に対するレディネス

9名のうち、1名が3ヶ月程度の滞日経験、そしてもう1名が数週間の旅行経験をしている。残りの7名は今回がはじめての来日である。日本語学習に関しては、初来日のうち1名が自国で9週間の文字を含めた教育を受けている。すなわち9名のうち約2名が入門程度の日本語力、7名は日本語学習がほぼ初めてといえる。

1.4 文字教育の取り組みと教材

全員が非漢字圏の学習者であり、それぞれの国の状況から日本語学習の機会及び日本語そのものの情報を得られることはかなり困難なことが、2008年夏の時点で予想しえた。そのため従来とは違った文字教育の方法や活動を組み込むことを考え準備した。実際に行った活動とその実施時期は表1に記載する

また使用教材は以下である。

①かな教材：「Self-Study Kana Workbook」

スリーエネットワーク (9月に各自へ送付)

- ② 漢字教材: 「Write Now! Kanji for beginners」スリーエネットワーク
- ③ 日本語教科書: 「みんなの日本語 I・II」スリーエネットワーク

2. 連想法を使ったモデル授業

2.1 連想法実施の経緯と授業方法

連想法を使う文字教育の存在は日本語教育界では有名だが、カード教材の使い方等がよくわからないというのが教師の間の評判であった。本学でも個別に使用した経緯があるが、いくつかの問題点もあり、まず実際の授業を見ることと開発者から直接話を聞くこと、そして学習者の感想を聞くこと等が必要と思われた。またモデル授業(教師・学習者の二方向からの撮影)・検討会のビデオ、及び参加者の発言記述をもとに考察することを考えた。

2.2 参加者と教材

- ① 教師: カッケンブッシュ 知念寛子
- ② 学生: 日本語研修コース 10名(この時点では9名であったが、本人の事情で1名は12月末に帰国)。10月初めに来日し8日から17日までの時点で、前出のテキストと文字カード(文字のみ)を使って、ひらがなの指導を一通り終えている。テキストを事前に受け取れた者は程度の差はあれ、来日前に自己学習を行っており、学習者の中でひらがなの定着にはばらつきが見られた。
- ③ 観察者: 日本語教師(ボランティアを含む)、国際交流協会等で外国人の支援をする人、日本語教師養成課程の学生の11名である。
- ④ 教材: 1970年より授業者が開発したひらがな速習英語版教材のカード。1999年に教師指導書及びカードが出版されている。「HIRAGANA /KATAKANA in 48 minutes :Teacher Guide」

2.3 実施(授業の流れ)

午前のモデル授業では、教師が学生に行った連想法の授業を日本語教師らが金魚鉢方式で観察を行い、そこで得られた情報を元に検討会を実施した。

観察と情報収集の方法として、観察者にお願いしたことは、漫然と授業を見るのではなく、モデル授業開始の前にまず一人の学習者と話し合い、そして担当を決めて、その学習者を中心に授業を観察する、授業後は学習者の感想を聞いて自らの観察内容を記述する。その後観察と聞き取りから得た学習者の情報と自らの感想を出し合い、また教材や教授方法の新たな情報を得て、最後に自らの意見を記述するという

一連の活動である。詳細は表2に記述する。

2.4 学習者の評価

観察、口頭、記述による学習者の情報は表3にまとめる。学習者には今回のモデル授業の協力依頼の際には、観察者がいること等を説明したが全員から了解を得られ、授業にも積極的な参加が見られ、多くの意見や感想が出された。ほぼ全員がこれまでの暗記式と違って、連想学習法が有効であるとしていたが、以下にまとめる。

- ① 創造的でありストーリーと音を結びつける方法は効果的である
- ② 50分の中で46文字をテンポ良く進める方法は効率が良い
- ③ 似ている文字を特に意識してグループにし、またストーリーがあるので、その違いがよくわかる、不確かだった部分が明確になった
- ④ 英語が使われていてよくわかったし、安心できた

またマイナスの意見としては、以下のものがあつた。

- ① 英語がわからない人には問題がある
- ② すでに覚えていたので、ストーリーで逆に混乱する時があつた
- ③ カードのイラストの物の名前が国で使っていることばと違うものがあつて理解しにくかつた
- ④ 既習の(少し知識のある)人にはいいが、全く初めての人には難しいのではないか
- ⑤ この方法は一度きりでなく、くりかえさなければ忘れてしまう

表2 モデル授業の流れ

2008年10月18日(土)

国際センター2階 講義室

- 1 モデル授業 10時30分-12時
 - 1) 観察者・学習者のペア自己紹介活動
 - 2) ひらがな授業(観察)
 - 3) 観察者による学習者インタビュー
 - 4) 学習者・観察者感想記述
- 2 勉強会 13時30分-6時30分
 - 1) 観察者(参加者)自己紹介
 - 2) 今日の授業について(授業者)
 - 3) 授業ビデオ(1989年広島大学)視聴
 - 4) 学習者の感想報告(観察者)各2分・学習者の記述コメント報告
 - 5) 授業者へ質疑応答
 - 6) 韓国語版「韓国人高校生を対象としたIS連想法・ひらがな学習カードの開発～記憶法略及びARCS動機付けモデルからの評価」の紹介
愛知大学 梅田康子氏
 - 7) 授業及び紹介に関する質疑応答
 - 8) 参加者 アンケート記述
 - 9) 最後の感想発表 参加者全員

さらに、授業に対する評価として、教師の作る雰囲気がとても友好的で常に笑いが絶えなかったこと、時間が短く感じられたことがあげられている。また来日後2週間で日本人とペアになって意見交換をすることがとても楽しかったというものがあった。

2.5 参加者の評価

2.5.1 授業者との質疑応答

授業者のカッケンブッシュ氏からは、全員が程度の差こそあれ既習者であったこと、既習者の情報及び英語力にも差があったため、いつもと違った状況であったということが述べられた。その後、参加者からは①教材が英語話者へのみしか使えないこと、②連想法に関するカテゴリーがあるのかどうか、③すでに日本の語彙を知っている人たちに対する方法があるか、④異なる文化背景の人の集団に対してはどのようなか、といった質問が出された。そして、特に学習者からのマイナスの意見に対するコメントが要求された。

これらに対し、①英語話者以外の各国語版や子供向けのものが開発されていること②認知心理学的な分析は行っていないが、Image と Story の頭文字をとって IS 連想法と名づけ、イメージとストーリーを使うことで位置づけていること③学習者の視点・立場からのカード教材作成が望まれること等が質疑応答の中で述べられた。

2.5.2 韓国語版ひらがな連想法

参加者の関心は、モデル授業として見たこの方法が現実には有効であるかどうか、自らの実践に使えるかに焦点が当てられていた。勉強会の流れ6の、韓国語版に関する情報提供（愛知大学助教授：梅田康子氏）により、韓国での高校教師グループによる高校生への教材開発とその実験結果を聞き、短期記憶には非常に有効なことと同時に文字学習の導入に威力を発揮することと、その後の繰り返しの継続学習が必要なこととも確認された。

2.5.3 モデル授業と勉強会に関して

学習者観察と発表を通して、参加者全員が積極的に参加できたことや満足したことを述べている。

その中で、ひらがな連想法そのものに関する情報を得て、今後の自分の実践に使えるかどうかを検討したいという以外に、授業者が学習者と共に作るあたたかい雰囲気が非常によかったこと、このような「学び」の環境を教師として学習者に提供できている、また教師として自らが将来できるのだろうかという感想もあった。

さらに授業の捉えなおしのコメントが以下のものである。

「毎日の授業の中で、教材・方法・話し方等を振り返る機会もない、そのような時に、カッケンブッシュ先生のような静かな語り口で学習者をひきつけている、自分とは全く違ったタイプの授業を見たことに新鮮な思いがした。」さらに、「カッケンブッシュ先生の動きとそれに応える学習者の動きを見て、見たことを参加者で出し合って話し合い、それらを共有できたことが非常に印象に残った。」

2.6 モデル授業を振り返って

学習者の教材と授業に対する評価、参加者の評価を経て、コース開始後すぐの10月18日と、学習者に関する多くの情報を得られたことが一番の成果であった。

自らが授業者の際には、非常に一方的な見方で学習者を見ていることにも気づかされた。どのような雰囲気やどのような声かけが個々の学習者にとって心地よいのか、より学習の動機付けになるのか、事前の申請書に書かれていた情報とはずいぶん違うということも確認できた。

また、集中型のコースでは複数の教師が協力して授業を行うが、それが教師一人ひとりの教育観に基づいた様々なアプローチを提供できるという利点がある。教師の数だけ教育観があることを金魚鉢方式の観察を通して感じた。

さらにその後には、ひらがな連想法の有効性を知り、大切なことは学習者を見て、いつどのようにこれらを使用するか判断が教師にとって必要なことも実感できた。

3. 文字教育の取り組みと評価

3.1 文字教育を意識した取り組み

表1（取り組みの番号は表と照合）のように、今期は従来の方法に加えてコースを運営した。

① かなテキストの送付

2008年8月段階で前出のテキスト（CD付き）を送付するが、国の郵便事情のため1名の手元には届かなかった。この1名を除いては、日本語の文字についての情報を得ていた。

② 子供用かなカードの配布

ひらがな・カタカナのみを印字したカードに加えて、日本人の子供用のひらがな・カタカナカード（株式会社元林販売）を配布した。「赤ちゃんのあ」「アヒルのア」といった絵とことばのカードで、裏には書き順と「あいうえおのあ」という表記がある。配布時点（10月初め）では日本語の語彙を未だわからず、授業中には簡単に紹介するのみに終わった。

2月に確認した際はことばの3分の2以上理解ができていた。

③ 連想法モデル授業

2月のアンケートの中で、文字学習のうち3名がこの10月の授業で得たことが役に立ったとし、しかしカタカナは自分で覚えなければならなかったことやカードの配布が手助けになったとも述べている。カタカナに関しては連想法を実施するのを断念した。それは、教授者がその方法を理解していないことと、絵とストーリーの中で今回の学習者には理解しにくいものが含まれていてそれを整備する時間がなかったことにある。

④ カタカナことばを集めて発表

各人に5枚の白いカードを渡し、教室の外で見つけたカタカナのことばを写して教室内で発表した。これは看板等で多くのカタカナが使われていること、ひらがなの違い、様々な書体があることを自ら見つけてもらうことを目的とした。集めてきたものの意味が不明のものもあったが、日常多く使われていることやひらがなの個別することを確認できた。カタカナは単音で覚えるよりもひとまとまりのことばで覚える必要性も説明した。調査及び発表は積極的に行っていた。

⑤ 書道

書道の専門家に依頼して、筆を使って「永」の字と意味から好きな字を一字選んで書く活動を行った。学習者一人にそれぞれ日本人のパートナーに手伝いをお願いした。最終的に清書したものの展示会も行った。これは、漢字が意味を持つことや芸術ともなること、日本人が学生時代に書道を学んでいることを知ることを目的とした。書道家からは書き方にしぼられずそれぞれのびのびと個性的な書が書けているという評価を得た。

⑥ 毎日一字学習の開始

前述のテキストを使用し、毎日一字の読みと書きそして覚えることを始める。授業のない日には自己学習を要請し、テキスト以外に漢字練習ノートを配布し教師がチェックを行った。学習確認のためのテストは課が終わるごとに行った。毎日の授業の中で、漢字学習の時間や方法は担当の教師に任せている。

⑦ 日記の作成

毎日一字の学習と共に、毎日の出来事を書くことと習った表現を使うこと目的の日記に、勉強した漢字を書くことあるいはその日であった漢字やことばを日記の一つの欄に書くことを促した。個人によって差があるが、毎日日記を提出する人、その中で漢字やこと

ばの記入を続けている学習者がいた。

⑧・⑩ お礼状作成

特に幼稚園の子供たちに対しては、ひらがなのみで書くことになったときに、日本人の子どもたちが、ひらがな、カタカナ、漢字と時間をかけて学んでいくことを確認できた。

⑫ 漢字の継続学習の開始

テキストの漢字一覧表に学ぶ予定の日付をつけて配布した。コース修了時2月27日が78字で、学習を続けた場合10月末で323字（日本語能力試験3級）の学習になることを提示、また強く継続学習を勧めた。さらに継続学習を支援する方法（進捗確認やテスト）も必要と考えられる。

3.2 学習者からの評価

コース中の学習に関するアンケートやインタビューから得た文字学習に関する意見感想をまとめて記述する。

文字学習全般に関しては、ひらがな、カタカナ、漢字の順に学んでいく中でやはり漢字が似たような字が多く大変であること、しかし毎日一字は覚えやすく、生活の中で習った文字と出会ううれしさから、漢字学習は好きであるという多数派の一方、一人は、文字学習は自分の取り組みであり、今の練習量では少ないこと、自分一人で今後どこまでできるかわからないとし、さらに一人は、あまり好きではないしすぐに忘れるが数字のような大切な漢字もあるという意見が出された。

また学習者がほぼ本国では教師という点から、「帰国後日本語を教えることになったら～」の問いかけに対して、このコースで学んだ方法を自分なりに工夫して教えたいというもの、具体的には「何か短いストーリーを使い、漢字も日付も数字も同時に教える、その際品詞は色分けしておく」というものもあった。教えることに関して、自分の学生たちが日本語学習を希望していることや、自分が学んだことを忘れないためにも教えたいという声が聞かれた。

4 考察

以上から、文字教育に関する考察を述べる。

① 動機付けが必要

漢字学習の必要性を学習者自身が認識した上で学習支援ができること、少しずつ学んでいくことを情緒的に支援することも含まれる

② 時間の流れを考えた継続学習が必要

ひらがな・カタカナ・漢字教育への流れには、漢字の量を考慮に入れて、特に長い期

間を考えた継続学習が必要である

③ 覚えるためのストラテジー（学習方略）が必要

教室内では、記憶につなげる様々なヒントや教材（絵カード等を含む）の提供が有効なことや、学習者によっては様々な「読み」の全部ではなく大事なものを選んでほしいことや、書き順よりも形の認識を大事にしたいという様々な要望もあることも注意する必要がある

④ 自律学習へ向かう働きが必要

上記を総合すると、文字学習したいという意志のもとに、学習者にとっては終わりのない漢字学習に対して自分自身の目標を立てて取り組めること、そして教室で学んだ方法によって、カード作成を含め、自分で覚えるためのストーリーを作ったり、形の似た文字の区別を自分なりに考えたりする姿勢も必要であろう。また読み、書きに関する正確さに関しても、自分であるいは他者からのチェックをする環境整備も必要となる。

5 むすびにかえて

日本語学習者は文字をどのように学習するのか、学習者の数だけその方法はあるだろう。例えば 2008 年春期の本コースは、学習者が中国人 3 名、韓国人 1 名であった。4 月の開講時に 4 名とも既にひらがな・カタカナを習得しており、教室内で教えることはなかった。また漢字学習に関してもテキストは「みんなの日本語漢字初級」を資料として使い、中国人学習者には漢字練習ノートのみを配布し、簡体字との違いや読みを確認するのみだったが、韓国人学習者には自己学習が強いられた。全体的には文字学習に当てられる労力や時間が軽減され、より高いレベルの日本語の文法や表現の学習へと向かうことができた。ほぼ同じ時間数を使いながら、「みんなの日本語」を終了後、中級への橋渡しのテキストの学習も可能であった。

自分の学習を客観的に見るように、またそれぞれの学習スタイルを考えた文字教育の実施を考えたい。

一方で、非漢字圏の学習者にとって文字教育は日本語の最初の試練であり、この段階の学習がうまく進むことは学習の成果がよりあがることは言うまでもない。学習初期段階の精神的な負担を減らすことが教師の大きな課題といえる。さらにかな学習の後の漢字教育にも結びつく重要な点である。学習者個々の配慮ができるように、またそれぞれの学習スタイルを考え

るといった文字教育の今後も実施を考えたい。

付記：本コースは筆者の三隅をコーディネーターとして、4 人の教師が連携して実施したものである。様々な取り組みのアイデアやその実施の判断は、各教師からの情報を元としたことを断っておく。また、学習者の英語コメントの日本語訳には、村澤晋恵（徳島県国際交流協会）氏、青木洋子氏、舛形弘恵氏の協力を仰いだ。

謝辞：本稿作成にあたってモデル授業で来日間もない時期に協力してくれたに徳島大学日本語研修コースの 10 名をはじめ、勉強会に積極的に参加して下さった日本語教師の皆様、そして何よりも自らの授業を公開することによって、「日本語を学び教えること」の基本を提示して下さったカッケンブッシュ知念寛子先生に深く感謝をいたします。

参考文献

岡崎敏雄他（1997）「ケーススタディ日本語教育」、おうふう

カッケンブッシュ寛子他（1989）「50 分ひらがな導入法－『連想法』と『色つきカード法』の比較」『日本語教育』69 号

カッケンブッシュ寛子（2007）「連想法による韓国語話者用ひらがな学習教材開発のための基礎的研究-平成 17～18 年度科学研究費補助金（基礎研究 B）研究成果報告書」

水田澄子、鈴木庸子、梅田康子（2008）「韓国人高校生のための IS 連想法ひらがな学習カードの開発－記憶法略および ARCS 動機付けモデルからの評価－」『日本語教育が学会世界大会 2008』予稿集 3、pp.254-257

P.パニスター他 「質的心理学研究法入門」（2008）新曜社

Michael J. Wallace 「Action Research for Language Teachers」（1998）Cambridge University Press

表1 2008年秋 徳島大学日本語研修コース

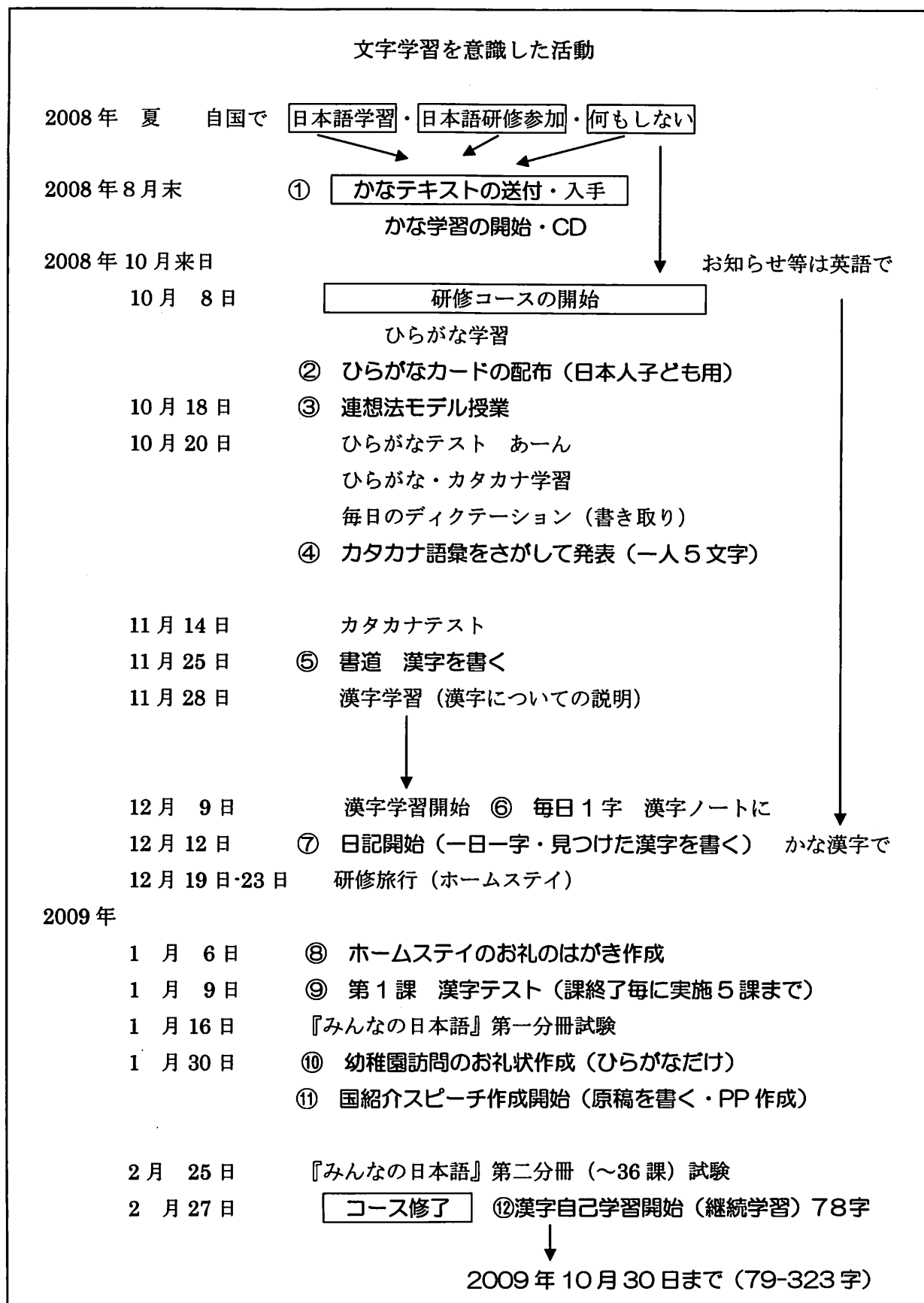


表 3

2008年10月18日(土)モデル授業 学習者コメント

学生	①観察記録その他	②インタビューコメント	③記述コメント(英語を要約)	備考
①	真剣に聞いて反応、おそらくストーリーを熱心に追っていたのではないか。	これまで暗記式で学んだ。ストーリーと学生の知識を関係づけている。似た「れ・わ」等を覚えるのに効果的。	・創造的・ストーリーがある。・文字学習の助けになる・笑いが絶えなかった	既習
②	悪い点がなかったので、無理に何が難しいかを聞いた。	連想と物語が結びつく。音が印象に残る。英語がわからない人は覚えにくい。連想が逆に混乱を招くこともある。	・ひらがなと英語のストーリーが関連・復習できた。・日本人との話しがよかった。	英語教師
③	積極的に授業に参加(うなづき・発声)。呼び方の違うものに対して質問する。	似ている文字を覚えるには役に立つ。自分はネイティブではないが英語が出来る人には有効。	・ものの名前が自分の国と違うものは連想ができない。・これで完全に覚えられた。	
④	メモをとりながら熱心に聞いていた。	まだ不確かなので覚える方法を得た。機械的でなく連想法は効果的。	・ひらがながまだ難しい。 ・この方法で簡単に覚えられそう。	英語教師
⑤	熱心に受講。笑顔でうなづく。自分の指名がこなく残念な様子が見られた。	既に覚えていたので逆に混乱する 때가あった。母語と英語が違う部分でも理解しにくい。「そ」は結びついた。	・先生がとても楽しくて、効果的。 ・時間が短く感じた。	既習
⑥	最初は何が目的かが不明の様子。後半は積極的に参加、イメージと文字を整理しながら確認。メモ取り。	想像・視覚・聴覚を使って学習することは重要、早く理解ができる。有益であった。子供にとってもよい。	・最初に文字を学ぶにはとてもよい方法。繰り返して学ぶと良い。	言語教師
⑦	ノートを一生涯懸命とっていた。発音・ストーリーが書けていたのを見た。	説明がわかりやすかった。「を・ぬ・め・も・む」等がおもしろかった。好きなのは「る」と「ろ」。	・創造的、効果的で、好きなストーリーのことばがあった。・リラックスした雰囲気。	
⑧	教師とカードを見つめている。ノートは後半から。アルファベットを見ている。大きな声で発音をしない。	情報の多い授業だった。文字が絵になることがおもしろかった。よく似た文字の違いがわかった。文字が46あることをはじめて知った。	・ひらがな46文字を知った。・文字と絵が結びつくことがわかった。・先生方に感謝。	英語教師
⑨	真剣に聞いて、メモを取っていた。「ぬ」「め」で混乱、あとで発音できるように。	似ているひらがなは混乱する。「ぬ」「め」「ふ」「く」「ほ」。アルファベットの絵による覚え方と同じ。	・絵と関連して覚えるのは効果的。・先生の笑顔が大事。・初めての人には少し難しい。	英語教師
⑩	ほぼ全ての文字とストーリーをメモ。最後の10分は疲れた様子。	英語は母語なのでわかりやすかった。他の人はどうなのか。「あ」アンブレラ=雨のように、日本語の語彙もあれば。知らない言葉も使われていた。	英語話者にとってはとても助けになる。イラストわかりやすかった。特に「key」と「き」が結びついた。	